

〈子どものくらしに自然を〉

## 海を子どもたちの

## 遊び場に

山田 利行

(出会い塾)

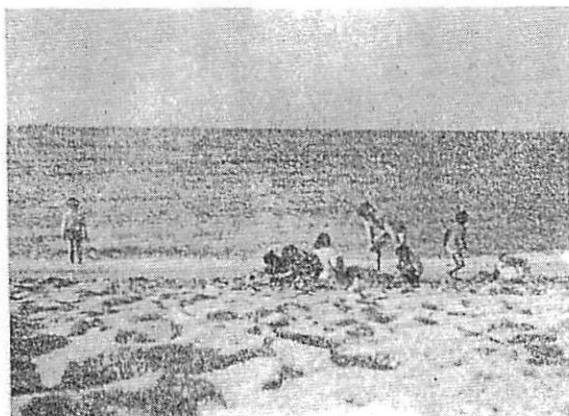
まあ、見といてください。五分もたてば必ずくつをぬらす子がでてきますから。

子供たちはね、海に来るとあんなふうには最初はちようどなぎさ線に平行して横一列にならなかつたころになるんです。おとなだと視野一八〇度とでもいいますよ。海にきた最初の「仕事」は海が眼に飛びこんでくるんですね。海は広いな、なんです。これは子どもでも同じかもしれせん。

子供とおとなでそのつぎにくるものがちがうんです。おとなはやっぱ景色をながめるといふふうなんです。ただ焦点が船だとか水鳥だとか水遊びしている人たちにか何

かにしぼられ、また移っていくんですね。ところが子供は海のはた、つまりなぎさ線まで近寄ってみたい衝動にかられる。子供同志ならそれこそ一目散というところでしょうけど、親や私たちに引率されてということになるとおとなの顔色をうかがうんですね。行ってもいい、そう感じるともうおとなのことなんか意識にない。

くつははいたまま。くつしたものはいたまま。波が寄せてきてもまだ、とてもじゃないがぬれるわけのないところにつたっている。それでも波が寄せてくれば一応あとずさりする。波がくるわけがない。それじゃおもしろくないから前進する。まだまだ波はこない。もつと前進。ウワァッと大きな歓声をあ



げてあとずさりする。冒險はだんだんと拡大していく。前進、退却、前進、退却。海は広い、子供の歓声は拡散し、ただはしゃいでいるだけにしか見えないが、じつはありったけの声をだしている。町中で、家でこんな大きな声をだすことはないでしょう。

こんなことをくりかえしていたら五分もすれば必ずくつをぬらす子、正確にいえばくつしたをぬらす子がでてくるわけです。まあ見といてください。そりやね、複数の子供たちがおれば一度にみんながぬれることはない。前進していくいきおいも退却するタイミングもまさに個性があるわけですから。そのだれかがまずぬらす。私なんか、ようこやうって子供たちを海につれてくるでしょう。子供は私に「ぬれた」といつてくる。「ぬれたん、あつそう」とこたえるだけなんです。さあ、ひとりぬれてこっちにきよりますよ。

「ぬれたあ」

「ぬれたん」

「ぬれてん」

「あつそう」

「ぬれた」

「……………」

「ぬいでもええ」

「すきにしたらええやん」

「ぬごうと」

「くつしたもぬごう」

「見といてな」

「しらんでえ」

行つてしもうたけど、もう二人め、三人めとくつをぬらしはじめるんですわ。そうしたらね、さっきの子がくつやらくつしたをぬいだもんだから、なんぼでも海の中にはいつていけるでしょう。くつがぬれてウジウジしている連中はいつべんにまねをするんです。つまり、じきにみんながくつをぬぎくつしたをぬぎして、どこにおいたら波に流されないか考えてふたたび海へもどっていく。もうこうなったらどんどん海の中へはいつていくんですね。このへんを少し説明しましょうか。

今はぬらしてからくつをぬいだんですが、はじめからくつをぬいで海にはいるとするとね、最初足に波がかかるヒツとするんですよ。そのあとで「つめたい」と声があがる。つまり最初は言葉にならないんです。ヒツとか、ウワァとかなんです。極端にいえばそのような感動を十分に味わったあとで「つめたい」などと表現するんです。ヒツの方が「つめたい」より。つめたい、んですね。こちらあたりがかんじんなところで、おとなは子供に何がおもしろいかなどとたずねるのですが、ほんとうにおもしろい部分は表現しにくいんですね。

「つめたい」と表現してしまうと、もうつめたくない。だからもう一度今のつめたさを味わおうと海へ少しはいっていくんです。くるぶしあたりに波がくる。ヒツとする。さらに前へ。すねに、ひざに、エスカレーターしてくる。ひざの上を波がこえるようになると、両方の手が半ズボンのすそをつかんでひっぱりあげている。足はつまさきたち。ズボンをぬらすまいとするが、ズボンがぬれるのはもう時間の問題。

ズボンがぬれるとこの「遊び」はおしまい。はじめになぎさ線にならび、そしてズボンをぬらすまでのこの「遊び」を必ずといってよいほどにはじめて海へ来た子供はするんです。この「遊び」に寄らない子供はみんなのするのを見ているか、砂浜にへたつて何をつくるというわけでもなくただ砂いじりしているだけのことが多いんです。はたから見ればおれたいくつそうにも見えません。

ズボンをぬらしてしまうまでの時間がだいたい一五分。いきってしまいう自備はないんですがそのぐらいです。ところがある学童保育の子供たちをつれてきたときは四〇分かかりました。これは去年のことで今年同じことをしたら二〇分でした。なぎさ線からズボンをぬらすところまでの距離は三メートルほどです。常に「つめたい」という新鮮な感覚を求めて海にむかって前進していく行為にどうして四〇分もかかるんでしょう。

小さい子供はブランコがすきですね。ぶらんこ、ぶらんこと毎日毎日ブランコで遊びますね。そして、あのかえしこそ子供の成長に不可欠だということはおとなのなっとくするところなんですね。海ですと波のくりかえし打ち寄せるさまがブランコのそれと似ているように思うんです。だから子供もあきずに波と遊ぶ。それが一五分であっても四〇分であっても、いわゆる個人差のうちだといつてしまえば特に問題はないんですが、やっぱり割り切れないものがのこるんですね。

ズボンをぬらしてしまうと、とにかくさつきくつをぬいだところまでもどつてくるんです。ふたたび視野が広くなり波をながめながら、さあ次は何をして遊ぼうということになる。これまではみんなが同じことをして遊んでいたのに、これをきつかけとしてそれぞれが思い思いのことをしはじめるんです。砂をほる、砂をつむ、貝をみつめる……。死んでくさったさかなをひろつてき、指先でつまみあげて得意になる子。海中に突き出した突堤でカニをとる子。ウワァー波がきたあ、と歓声をあげながらダムづくり。に夢中になる子。一人だけ、二人で三人で、あるいは四、五人でここぞと思う場所を確保して遊ぶようになるんです。こうなったら、もう帰ろうか、と声をかけてもちょっとやそつとで動かないんです。

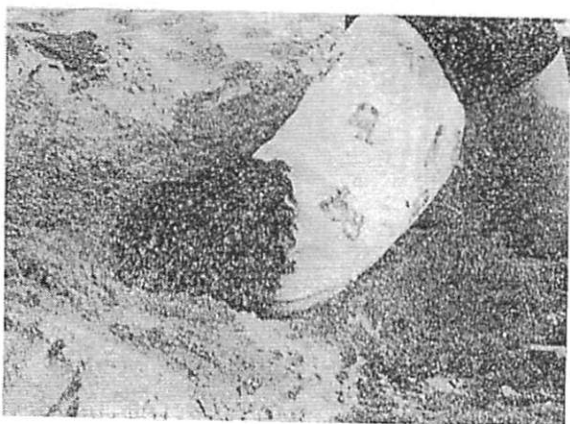
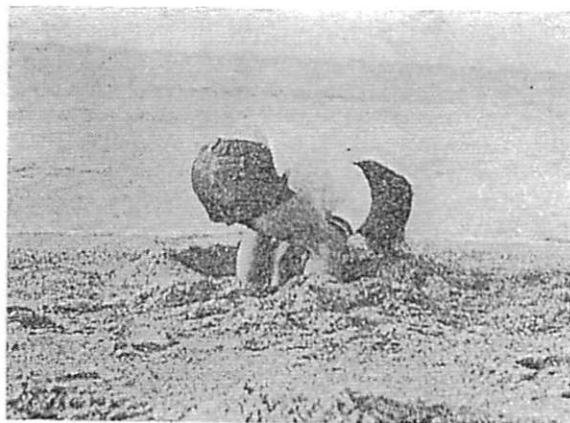
子供に遊び場がないっていいですけど、ここでしたら駅

の裏から五〇メートルは砂浜がありますよね。ずいぶんせまい海岸なんですけど、これの子供の遊び場と考えたらずいぶん広いと思いませんか。東西には延々とさあ何キロあるんでしょうね。ブランコやすべり台はもちろんのこと植木も藤棚も、つまり公園らしいものは何も無いけど、やっぱりこの砂浜自体がすばらしいと思うんです。

たとえば、あそこで穴をほっとる子がおるでしょう。砂でなかつたらスコップでもいるところでしょうけど、けっこう深くほ

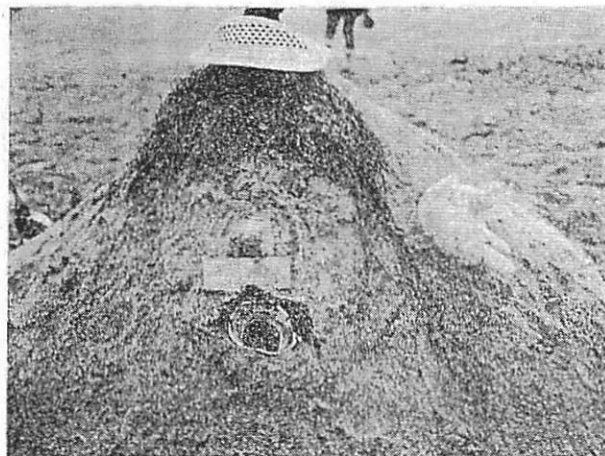
てるみたいですね。ずっと腰をまげとるでしょう。今の子供の生活の中であんな姿勢を長時間、しかもみずから好んでするなんて考えられへんのとちがうやろか。本人になってみるとわからへんのやけど、今あの子の眼はほっている手の先にあるんところがうかな。つまりおとなはばくぜんと、砂ほりなんかしてやっぱり子供やな、ぐらいにしかみてないが子供はすごい集中力やねんね。少なくなつた指先や手の労働ともいえると思う。

学童保育のある子供はいろいろな



ものを船とみたてて突堤より出港させた。板ぎれ、漁師が捨てたんだらう網につけるウキ、ビタミン入りドリンクの空ビン、ジュースの空カン、だいこんの切れはし。一見きたならしいが砂浜にはありとあらゆるゴミが集められているんです。

私がアイデアをだして十人ぐらゐの子供たちとで一メートルほどの高さの砂山をつくったことがあります。その



横っ腹に「顔」をつくったんです。眼はムラサキイガという貝がらをつかい、鼻はパンクしたゴムボールです。口は紙コップをいれるんですが、底を破っておくと「飲む口」になるんです。つまり水をいれると砂に水がすいこまれて、まるで水をのんだかのように思えるんです。髪の毛は海草です。軍手が落ちていたのでこれに砂をつめてさわってみ

るとほんもの  
の手みたい  
なんです。気  
ちがわるい  
ですよ。わり  
ばしでうでを  
つくり砂山に  
つきしまし  
た。ひょっと  
したらズボン  
が落ちとるか  
も思ってた  
がしたら、ね  
ずみ色の作業  
ズボンが落ち  
とったんで  
す。そした

ら、子供が自分のぞうりをはかせ、帽子をかぶらせたんです。子供たちは空カンに海水をくんでは何度も「飲む口」に注ぎこんでいました。

子供ばかりかおとなもけっこう海には魅力を感じる人が多い。通りがかったおとなたちが子供のしていることに笑顔を見せ、声をかけてくる。子供は子供でつりをしている人に「収穫物」をねだったりするんですね。見知らぬ人同士が親しく声をかけあうなんて町中の公園では考えられないことでしょう。むしろ警戒するぐらいですからね。もちろん海岸も決して安全というわけではないでしょうけど、何といっても多くの人の出会う場であることは確かです。

何人かのおとなに聞いたんです。子供のとき須磨海岸へ行きましたかと。たとえばこんな話があるんです。自分が年長者で近所の子らと何人かで海へ行こうと決める。行きは電車でいったのですが、途中でアイスクリームなんかほしくなる。けっきょく帰りの電車賃がなくなり歩いて帰ることがよくあったと。

海は遠くの人までもよびあつめる魅力をもっているんです。その海が汚れてきている。埋立てがどんどんすすむ。この海岸では養浜事業というのが行われておって、ここにもってくる「砂」がまた妙なんです。水族館の裏あたりがすでにその砂なんです。ゾウリに砂がはいると足が痛いです。くつの中にはいれればガマンができないんです。は

だしであるくとザラザラし、また足が砂の中にめりこんでいくんです。日光浴でもしようかと寝ころべば背中が砂がくこんでくる。砂浜という景観だけを養浜したんですね。こんなところで子供を遊ばせたら砂浜をはじめとする海のイメージをかえてしまうでしょうね。おそろしいことだと私は思います。

海の魅力はその素朴さにあると思うんです。町中と比べものにならない広がりを感じさせてくれます。波のくりかえしくりかえし寄せるあの音は子供もおとなも共通に感じる快よいリズムだと思えます。だからこそ、子供はその直線的な行動性ゆえに最初波の中にはいつて遊ぶんだと思うんです。海にきた実感は子供にとって直接水にふれるしかないと思うんです。海にきた実感を得た子供はもっとおもしろい、もっと工夫のできる世界を発見し砂浜で長時間たわむれることができるということではないでしょうか。つまり、一五分の四〇分という波の中のナゾは、実感を得るまでの時間であり、あとにひかえている行動こそが海のほんとうの良さを知らせるものといえると思うんです。ただ波で遊ぶ時間を「通過」しなくてはならないという状況があるということだと思えます。

このレポートは神戸市須磨区高倉台団地の、もぐら・たんけんたい・(約二〇人)の子供たちをモデルにし、海岸は国鉄須磨駅裏に広がる一帯をさしています。

# 月刊 どの子も伸びる

部落問題研究所・同和教育における授業と教材研究協議会・共同編集

## 特集・子どものくらしに自然を

〈座談会〉子どものくらしに自然を

有馬 忠雄 / 大寺 俊紀 / 木下 睦男  
藤本浩之輔 / 渡辺 和俊

〈実践〉「自然だより」のある学級通信……………松影 茂樹  
〈三二講座〉「自然教室」を開くまで……………有馬 忠雄  
〈カメラルボ〉淀川自然教室を訪ねて……………南谷 静子  
海を子どもたちの遊び場に……………山田 利行  
〈自作を語る〉「コスモスの歌」……………今西 祐行

'81 10

部落問題研究所